

季  
能古博物館だより

紫赤色砂岩

郵便局前から北へ五〇mほど進み、海の方を見ると、何時もは、四〇mほど先の波間に見え隠れする黒い露頭が大潮の日の干潮時には、地続きとなる。

それは暗褐色、細粒の凝灰質砂岩で、粒径1mm以下の石英を含み、橙色の沸石が小さな空隙を埋めている。

凝灰質砂岩(新発見?)

この考えは、能古島の地質を始めて本格的に調査された九州大学名誉教授の故松下久道先生が、『九州古第三紀諸炭田に発達せる「紫赤色岩層」(一九四四)」の論文で述べられたことである。

本岩層の特徴である紫赤色は、この岩石が火山砕屑物質を含み、凝灰質であることに起因するという。

その中で紫赤色の細粒砂岩が、北側の緑灰色中粒砂岩と南側の淡褐色色の粗粒砂岩に挟まれ、幅一五mにわたって露出している。層理は不明瞭であるが南に三〇度傾斜し、厚さ約七mを有する。

東海岸沿いの道路を北に進むと、「コーヒー園入口」のバス停があり、その前の海岸には残島層下部層の浦ノ城層が広く分布する。

紫赤色岩層

地質博物館・能古島(7)

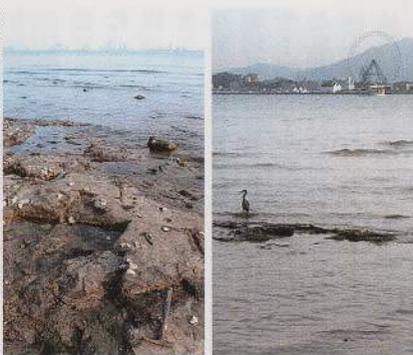
能古会会員

小川 誠

軟岩ではあるが固結度が高く、低平な頂部はほぼ新鮮である。

そしてこの岩石の特異性は、乾燥した試料を水に浸けると膨潤し、直ぐに崩壊して元の砂に戻ってしまうことである。海中では固結していた岩石が、陸上で水に浸ければ崩壊するとはいかなることか。今後の検討が必要ではあるが、やはり、古第三紀残島層の中では異質の岩石なのである。

能古島では、これまで前述した紫赤色岩層や植物化石を含む白い凝灰岩の存在は認められていたが、このような凝灰岩は未だ知られていない。つまり、この凝灰質砂岩は始めて目の目を見た新発見である。



大潮の干潮時の露頭

波間に隠れる露頭

能古博物館だより

今回の発見は、干潮時に遭遇した幸運とも言えるべきであるが、このことは通い慣れた道にも振り返る余地があることを示している。そして我々の行く先で再びこのような幸運を願うのである。

能古島の地形図

手元に四枚の能古島の五万分の一地形図「福岡」がある。発行年次はそれぞれ明治三十七年、昭和五年、昭和二十七年、及び昭和五十二年である。

これを見て気が付くことは、能古島の名称が古い残嶋から残島となり、昭和二十七年版以降は能古島となっていることである。

「能古島」は、昭和一六年、残島村が合併して福岡市能古となったことによるが、「嶋」から「島」への変更は簡略化であろうか。

また、昭和五十二年版に載っている東海岸の「城ノ浦」は、昭和二十七年版以前には「城」と浦が逆の「浦ノ城」と表記されていた。聞けば四十七年度版から変更されているそうである。

念のため、国土地理院に問い合わせたところ、次の回答があった。

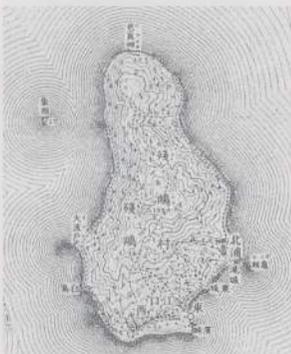
「昭和四十七年一月二十八日、当時の担当者様がそれ以前に何らかの指摘があったためかと思われますが、能古島漁協に電話して確認し、「浦ノ城」を「城ノ浦」(しろのうら)に訂正しています」。

地質学者は新しく地層名を付ける

昭和52年度版



明治37年度版



福岡

昭和52年12月28日発行 (4色刷) 許可なく複製を禁ずる  
著作権所有兼発行 国土地理院

際、通常は国土地理院発行の地形図の地名を使用するので、地名の表記には敏感になっている。

実は、本文連載のために能古島の地質文献を調査していた時、残島層下部層の浦ノ城層の名称が現在使われている「城ノ浦」をさすことに気が付き、古い地形図に当たって、地名の変更を確認したというのが今回の裏話である。

旅の終わりに

私が「地質博物館 能古島」を連載するようになったのは、平成一三年の秋、「能古の風写真コンテスト」に「龍宮城」と

題する作品が入賞し、表彰式で菊地事務局長に地質博物館を作つてはと提案した折りに、先ずは何か書いて下さいと言われたのが発端である。

初めに古い採石場と玄武岩の話などを書いたところ、図らずも文末に「(次号に続く)」とあり、次号を書いたらまたも「(次号に続く)」の連続に、尻叩かれて細々とは続けて来たのが実情である。

その内、この連載が長崎県地学会の目にもとまり、去年の秋は彼らの第二〇〇回記念・日曜地質巡検会の場所選ばれて、私の先輩で西南学院大学名誉教授の唐木田芳文先生と共に小雨の東海岸を案内し、会員の方から別際に、「次は西海岸を……」



地質巡検 (新波戸)

と言われたのは楽しい思い出である。能古島には、五〇年前の学生時代に地質学実習で歩いて以来のご無沙汰であるが、今回、龍宮城から戻った浦島太郎のように島を歩いてみると、昔の面影は全く消えて見聞きするものすべてが新しく、何度か島を歩き回るうちに地質学実習のやり直しの気分ともなり、何時しか私にとって楽しい旅路となっていた。

しかも、最近は一天然記念物、長垂のペグマタイト」の陳列室ができるなど、「地質博物館・能古島」としての体裁も整って来たよう非常に嬉しい。今後は能古島を構成する岩石の標本を集めることが宿題として残っているが、これで一安心というものである。

私は何時までも旅人であるが、ここで一旦旅の衣を脱ぐことにしたい。私の気儘な旅にお付き合い頂いた皆様には感謝の気持ちで一杯である。また、これまで唐木田先生には原稿を読み有益な意見を頂いた。なお、菊地事務局長を始め職員の方々にはテーマ探しの場所の案内など色々のご協力を頂いた。お蔭でこれまで続けられたとも言えるであろう。ここに記して厚く感謝の意を表する。(三六) 写真はすべて小川誠氏撮影

# 亀井家学を支えた女たち(8)

## 少稜(昭陽長女友) 下

福岡地方史研究会々員 早船正夫



「おすがた、様々に写されて、遠い昔から仰ぎ慕われておられますよ。」  
少稜敬い写す

於多福図 少稜自題画

### ◆少稜生涯の挫折—一人娘の死

少稜は結婚八年目にして女子を出産した。結婚後五年間は、夫の実家井原村に新居を構え、その後父昭陽の百道新地に移った。今宿に移居し

たのは、それから三年、出産の僅か四カ月前のことである。明らかに出産を見越しての一門挙げての処置である。

父の許では塾生も多く、父の助手役として浄書・添削の仕事もあり、また母の手助けとして家事もあるの、落ちついた環境で出産させてやろうとする親心から出たものである。これひとえに生まれくる子供への期待のしからしめる所であった。昭陽の初孫というだけではない。少稜の希有な才能への賛嘆がその子の生育の祝福をいや増し、自ずから取られた好意であった。

父昭陽は命名箋に三つの名を用意した。輝(テル)稔(トシ)そして紅染(コゾメ)。皆が紅染(コゾメ)に一致したのでこれにした。紅染の成長は順調に見えた。唯一の遺作、五字一行「仙人下九天」を見ても、とても五歳の書とは思えない天稟を感じる。

しかし紅染は五年八カ月にして天

死。一門の寄せる期待は儼く消えた。亀井家譜では只一句「嗚呼哀哉」と痛切な悲しみをしるす。

その後少稜は子をなさなかつた。紅染の死は少稜生涯で大きな挫折となった。

### ◆しかし雷首の医業は順調

何しろ「古医方」の権威、大阪の永富独嘯庵の直弟である祖父南冥の教えを受けている、という評判は、当時の今宿はおろか怡土・志摩郡一円、さらに唐津あたりまで聞こえていた。資力のある患者よりの往診依頼も続いた。周船寺の加勢儀屋(富永)、前原の綿屋(西原)、唐津の芳野屋(石橋)等の富商の古記録によっても、これを知ることができる。

なかでも最大の患者は五島生月島の捕鯨業益富家(豊屋)であった。

### ◆生月島益富家(豊屋)と亀井一門の縁

益富家は生月島捕鯨の総采配、五島はおろか全国でも一、二の大捕鯨業。各地の使用人、従業員は四千人といわれた。益富捕鯨はかつての松浦水軍を思わせる組織力をもって捕鯨にあたり、販売網は鯨油・鯨肉を主商品として広く張りめぐらされていた。当時肉といえは獣の肉は仏教上の禁忌とされ、魚鳥肉と鯨肉しか蛋白資源は無かつたし、鯨油も稲作の害虫駆除に使用され、共に社会の必需品であった。従って捕鯨業は全

国屈指の大企業業種であった。

家風としては代々節儉を心掛け、これが益富家存続の基礎となった。公共のための財の棄損も多く、五島を中心に新田開発、防波堤、船溜まりの建設。災害時は被災者の収容と施業等の支援活動をした。五島藩主への献金は代々計十五万両にもなる。二代目当主は京都仙神御所の造宮に二万両献じたという。

そのような益富家と亀井との関係が出来たのは、益富当主が南冥の祖徠学に関心を寄せ、また南冥の医療を信頼し、当主の主治医となつてからである。南冥の医局の最優秀がこれに当たっていた。また益富当主の子弟で亀井塾に入塾する者もいた。そして益富家からの塾運営援助金もあつたらしい。仕送られてくる鯨肉は、塾生や亀井家族にとつて、めつたに口に出来ない高級品の御馳走に、しかもしばしば、ありつけることになった。

### ◆雷首、益富家の主治医となる

雷首少稜夫妻が井原村から、百道の亀井社に移つて半年後、二人は平戸の旅をする。おそらく益富家主治医の挨拶を兼ねた診察であろう。

今宿に移つても益富家の主治医は続く。生月島往診の記事が出てくるのは、天保二年四月と五月、五代目又左衛門の臨終治療である。この時は少稜が留守日記「守舎日記」を丹

念にしたためている。

益富家の主治医として雷首は洋薬を採用した。雷首の洋薬購入の自筆記録が残っている。「モルヒネ」、「キナソー」(キニーネのこと。マラリアや解熱剤、「ヲヒム」(麻薬的な鎮痛・下痢止め)、「シツフルコヲル」(アルコールのこと)、「クレウソート」(クレオソート)等が記載されている。

南冥の医学の師、永富独嘯庵は再三長崎に遊学し、オランダ医学に関心を示していた。南冥自身も三たび長崎に遊んでいる。時代の趨勢として洋薬の効用は雷首も充分知っていたに違いない。

ただ、その端緒は益富家のような大患家の治療の機会によらなければなるまい。雷首の洋薬の採用は益富家のみならず、地元糸島・唐津に次第に広がった。

#### ◆医家の妻の仕事

少栗は愛児の死の悲しみに耐えて医業の補佐をしなければならなかった。

昔の医師の奥様は今よりも大へんであった。調剤の手助けが主要な仕事であるが、しかし雷首ともなると弟子や代診がついているので少栗はそれはせずともよい。もう一つの奥様の役目は患者の薬代の案配である。つまり、金持ちには薬代を相当にいたたく、貧しい人には差別を感じさせないよう診療と薬を。時には無

料でも与える。この当たりの記録が文書に残ったのを寡聞にして見たことはないが、この手加減と心配りが医家の評判を左右し、長期的にはその盛衰に関わることは容易に想像がつく。これは奥様の采配の如何にかゝる所が少なくなかった。この点現行の保険制度による医家経営とは相当異なる。

少栗はよくこれに応えた。少栗の揮毫する詩画書が世人に持て囃されることはよく知られるが、作品それ自体の評価も当然ながら少栗の世上の評判、つまり患家から慕われていたことと無縁ではあるまい。

#### ◆少栗の本命は「儒」の振興

しかし少栗に寄せられる一門の期待は医家の内助だけではない。言うまでもなく、「儒医兼帯」に於ける「儒」の役割である。夫雷首が果たすべき儒学の勉学と教授が、医業の繁栄にかまけて十分にやれないことを妻の少栗が果たし、亀井家学の面目を維持すること、これであった。

少栗は儒学の研鑽を幼児から目的をもって父昭陽から躡けられたわけではない。父や家塾の塾生を見様見まねで覚え、それが父の関心を牽き、後から儒学を本格的に仕込まれたというのが実際である。

少栗の弟鉄次郎(陽州)は勿論亀井家学を継ぐべき者として最初から嚴重な薫陶を受けた。しかし昭陽は

必ずしも満足していなかった。むしろ兄の義一郎(蓬州)に期待したが二十一歳で死亡。弟の修三郎も天稟並々ならずと期待していたが、これも六歳で夭死。この時は昭陽は「傷逝録」三冊を著して嘆いた位である。

昭陽は鉄次郎(陽州)をカバースるためにも、百道と今宿と離れてはいるが、少栗の家塾活動に嘯望せざるをえなかった。昭陽は儒医兼帯の内「医」に関せず、「儒」一本でこれまでやってきた。儒医兼帯の利点は充分判つていても、「儒」の振興を願っている。婿の雷首の医業が繁昌するにつれ、「儒」も盛んになってほしい。それは娘の少栗にしか期待できない。昭陽も寂しかったと思われる。

#### ◆少栗の学塾経営

少栗はこの点でもよく期待に応えた。当時でも寺子屋は普及していた。女師匠も少なくはなかったが、少栗のそれは亀井塾譲りの本格的な儒学塾の初歩段階を担うものであった。亀井塾を大学院とすれば今宿は大学過程を踏むものである。かくして少栗は晩年にいたるまで、自分の本務である家塾を続ける。

少栗の家塾には当然のことながら女子が多かった。また弟子の分布も今宿を中心とするが、気になるのは姪浜の子がいることである。姪浜と今宿とは、現在とは異なり海岸線は通行不便で、山越えしなければなら

ないことである。毎日の通塾は大変だったろう。百道の亀井本塾の方が近くて、距離も近く平坦であるのに。恐らく両社の間で教科課程による分担(例えば経書の難易度による)がなされていたのか、或いは少栗の学力、人望に引きつけられたものか。

#### ◆永之進(雋永)を養子とする

雷首と少栗は少栗の弟鉄次郎(陽州)の次男永之進(後の雋永)を養子とした。紅染の死後五年のこと、少栗は三十七歳になっていた。永之進は生後一年二ヶ月。父鉄次郎の亀井一門の将来を考慮しての理解があつてこそ手放したものであろう。尤も鉄次郎長男の紀十郎(後の玄谷)は四歳であった。

少栗は永之進の養育には、精意を注いだであろう。紅染の生まれ代わりと思う時もあったのではあるまいか。永之進を引き取った翌年には、出痘(ほうそう)麻疹(はしか)にかかる。

教育は慎重を期し早くから始められた。十歳「詩経」卒業、翌年「尚書」と「傷寒論」卒業と家譜に記載されている。相当な進歩であると、永之進の父鉄次郎の幼児の時の進み具合と比較して少栗はそう思った。

永之進(後の雋永)の医師教育に

### 能古博物館だより

は博多の開業医、平嶋生民の協力も逸することができない。南冥の子弟であるが、気分は亀井家族で、昭陽の最後をも看取った。時々今宿にまで現れ、永之進の勉学を慈しんだ。雷首の死後、永之進の長崎修行にも、江戸修行にも、一緒に付いていつてやっただし、永之進の結婚相手に博多の川淵家を世話したりした。

少槩は書画が有名になると、永之進の手土産になると考えて、すすんで揮毫しこれを持たせてやった。産みの母同様に養育し、永之進も実の母同様に仕えた。晩年にはすっかり甘えた母親になってしまった。

◆少槩の詩書画は何故持て離されたのか

少槩と言えば詩書画即ち文人画が、すっかり世間に膾炙してしまった感がある。事実、少槩の文人画の掛け軸を床の間にかけることがステイタス・シンボルのように思われた時期が長くつづいた。父の昭陽の書もそのように受け取られたが、少槩のには更に大衆性が加り、人気では父を凌駕した。

文政六年少槩二五歳、福岡藩は文人画二作を、幕府の高官長崎奉行から特に指名依頼されたことを伝えた位である。

それはそうだろう。絵の方が書よりも掛け軸にして見栄えがする。少槩の絵柄も一般の好みに合わせて



「厝に從い今日改らたまる、花と去年は同じにするも、病みつかれて何んの顔かある、春風六十四(八八)翁」  
少槩 五十五歳作

雷首賛 少槩画 梅図(扇面)

四君子(蘭・菊・梅・竹)を多くする配慮をしている。

しかし文人画の本領は、絵に書かれた題詩と書にあるが、少槩の詩才と古文辞学の学力、それに亀井学派の書風。いずれも基本が生かされ画面に満ち満ちていて、決して器用な絵だけではない本物が人をひきつけたのである。

少槩の人柄がひろく好まれていたのも一般受けの基であった。夫雷首の賛のある夫婦合作が好まれたのも同じ理由である。

少槩生涯にいくらの文人画が書かれたか不明である。ただ夫雷首の死後少槩の最期までの五年間に書かれた分が相当割合を占めることは明らかである。夫亡き後の寂しさもあつたらう。幼時から慈しんできた養子雋永は二四歳となり、そう口出すこともあるまい。本当に根つから好きな書画こそ自分の世界と思いつめたのかも知れない。

少槩の晩年、白扇子を買い求めたという。本来、揮毫をお願いする時はこれにと用箋を差し出すのが普通であった。それを作者自ら用意する。悪くすれば商品化を図ったとも考えられようが、少槩のサーピス精神から出たことと受取りたい。

少槩の文人画には四君子を画材にしていること前述の通りだが、中には山水、果物等の静物で芸術性の高

いものも多い。いずれも他に頼まれたものでない自発的な高まりによるものであつて若い時の作品が多い。

#### ◆原菜蘋と少槩

原菜蘋と少槩とは、江戸末期の筑前の二大閨秀詩人としてよく知られる。しかしその生き方には相当違いがある。菜蘋が後半生放浪詩人のような生き方をしたのに比べ、少槩は有能な主婦としての一生を送った。

原菜蘋は秋月藩の儒臣原震平(号は古処)の第二子。少槩より一歳年上である。

原古処は亀井南冥を師とし、昭陽とは終生親交を結んだ。従つてそれぞれの娘どうしで幼児より交遊があつた。

菜蘋は瓜実顔の秀麗美人で背丈高しと語りつがれている。少槩には美人との語りつきはない。

菜蘋は二八歳で秋月を出郷し、悠々の旅をして江戸に着き、二十年の滞在。途中で父古処の看護のために帰郷するが、父の遺命で再び江戸へ。最期は長州萩城下で没す。その間、深い交際をなす学者、文化人二三に止まらない。死ぬ際に「古処詩集」と「菜蘋詩稿」を併せ上梓するように看取った長州藩士長三州に望んだが実現していない。ただ、南冥が愛用していた印「東西南北印」を南冥の死後、昭陽が原古処に贈り、さらに古処が娘に渡したものが、

長三州に遺され今は秋月郷土館に保存されている。菜蕪の流転を表象しているかの如くである。



少槩画 高士遊歩図

少槩の六十歳の死は早過ぎたと考える人もある。愛児紅染の夭死が生涯、緒をひいたと同情する人もある。

これに反して少槩が旅をしたのは平戸行き位であとは百道と今宿で亀井家を守った。当時の社会道徳に照らして世人の評価は、いずれが高かったか自ずから明らかであろう。

◆少槩六十歳没す

嘉永五年（一八五二）雷首没。六四歳。この時少槩は五五歳。それから五年後少槩もなくなった。二人の墓は福岡地行、浄満寺の亀井一門墓地にある。南冥昭陽の墓も同寺にある。福岡県文化財に指定されている。

それはその通りであるが、父の亀井家学にかけた思いを一身に背負い、医業の繁栄を支え、学塾の経営に腐心し、そして好きな文人画を描き続けた一生に、満足の笑みを浮かべたのではないだろうか。

◆早船助次郎日記にみる少槩の人物

この助次郎とは少槩の次妹「敬」の子で、姪浜の五島屋（早船）の当主になる者であるが、その十五歳の日記が筆者の手元にある。



早船助次郎日記

その内伯母少槩に関する記事がある。

〔天保拾五年四月十三日〕

東網屋御宮籠より帰り「残島二踊見二行クト言ッテ」弁当持チ「浜二行ッテ」船待ッ所ニ「今宿おばさま（少槩のこと）新地（百道亀井塾のこと）より帰り掛けニ」寄り横濱におとりあれと言ふて「連立ッテ行ク四六人」夕七ツ頃帰ル

（意訳）残島で踊りがあるので姪浜の浜で船をたのみ待っていたら、今宿の伯母様が新地の祖母様（昭陽未亡人伊智）からの帰りがけ立ち寄られ、「よかよか、横濱に行つてやんなさい。」と言うので連れ立っていった。四六人。帰りは夕方四・五時頃になった。「少槩四十七歳の時のこと」

こうしてみると少槩も、才知溢れる文化人というより、普通のバイタリテイに満ちた「おばさん」ではな

いか。  
私の少槩観は、長らくこの記事に由来しており、本稿もこの見方に基づいて書いた。

◆その後の亀井家学

暘州は明治九年没。六十九歳。少槩没後十九年である。暘州は二十四歳で御書物預り役として取り立てられた。平土ながら父昭陽の城番のような武力を第一義とする役目ではな

い。これは昭陽の培った信用と亀井家学への敬意のしからしむる所である。

しかし暘州の儒学そのものは昭陽よりも進歩せず著書は少ない。第一儒学そのものが学問の中心から遠のき、世間の関心も薄れ始める。暘州の子、玄谷は明治二十四年、六十二歳で亡くなる。明治期には宗像中学の教師を勤めるが著書はない。

雋永は医家も経営していたので、一応亀井家学の門を張ることが出来た。しかし洋式医学が医界の主流になることを認識しながらの晩年であったろう。雋永は明治十九年、五十三歳で没。少槲の死後二十九年である。

今宿亀井家は長くその保蔵する書籍・書簡類・書幅物を頑固に守り続け今日に至る。亀井家学の意気地みたいな気もする。

そして雋永のただ一人の男子「禽」の死後玄谷の三男八斗を養子に迎える。その孫 廣氏は医師をめざし長崎医学専門学校（現在の長崎大学医学部）在学中、不幸にして昭和二十一年八月九日原爆投下により死亡、一門の希望は絶たれた。「嗚呼」の感が強い。

どうか何時の日か亀井家学の志を継ぐ者の現れることを切望するばかりである。

◆その他の亀井家学を支えた女

本連載稿では、昭陽の妻伊智とその娘友（少槲）の二人を取り上げた。勿論、時代の推移に翻弄され、苦闘を重ねる亀井家学を支え続けた女たちは、この二人に限らない。むしろこの二人は栄光をかいま見ただけ、救いがある。幕末明治と儒学が学問の中核ではなくなっていく、亀井家学も世間の目から忘れられかける段階で、挽回を夢見つつ苦勞する夫を支えたひとを忘れてはならない。しかしここでは資料も不足しているので割愛する。

（注）早船助次郎日記  
助次郎は少槲の次妹敬（タカ）の次男。五島屋をつぐ。明治四十年没七十八歳。

本日記は天保十三年、十四歳の時に始まり、約二ヶ年で終わっている。少年の習作として百道の亀井塾からすすめられたものらしい。少年の目で当時の姪浜の風習がつつられ、少槲や昭陽の未亡人伊智、鉄次郎永進の出入りも、亀井塾々生の遠足の模様も記録されている。

感謝  
本連載稿の資料は筆者が独自に発掘したものは極く少ない。大半は能古博物館の前の館長故庄野寿人先生が本「能古博物館だより」その他に発表されたものを利用して頂きました。心より感謝し御礼申し上げます。

事務局こぼれ話

「亀井家学を支えた女たち」は平成十二年七月の第三十六号から早船正夫先生に執筆をお願いしておりますが、今回の四十三号が最終稿となりました。以前早船先生から早船助次郎日記の話をお聞かせいただいた際、それまで書物の中でしか想像できなかったイチや小槲が、日常のなかでごく普通の人々と係わりを持ち生き生きとした生活を営んでいる様子を見ることができた様に思います。この助次郎日記は平成六年の春、早船家（五島屋）の御親戚である石橋家（紙家）の石橋観一氏から譲り受け大切に保管してこられたものです。拝読しておりませんが早船先生のお話しを拝聴するだけでもこの日記の行間からは浦商人や浦に係わる人々に囲まれて暮らしてきた「イチ」や「小槲」をはじめとした女性たちが快活で力強く亀井家学を支えてきた、ことを再認識致しました。長い間快く執筆を続けていただき誠にありがとうございました。

「地質博物館・能古島」も今回の第四十三号が最終稿となります。はじめは石に関して何も解らなかつたのですが、教えていただいているうちに気がつくとう島を一周してしまつたという感じが致します。御趣味はカメラと言われるとおりの腕前は「能古博物館だより」で証明されています。

第二十七号から四十三号まですべて小川先生御自身の撮影です。当博物館、展示室の写真パネルのなかに



小川誠先生

も撮影していただいたものがあります。御願ひ事ばかりでしたがいつも快くお引受けいただきありがとうございます。

能古島ではボカボカとした暖かい日や小さな草の芽が喜こびそうやさしい雨など春を感じる日が多くなりました。当博物館も冬季休館が終り本日、三月一日開館です。

今期もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



早船正夫先生

能古博物館協賛会・友の会

【法人協賛会員】

- 浄土真宗本願寺派 浄満寺
(医)原土井病院
ワタキユーセイモア(株)
福岡メディカルリース
(株)オールアンドエム
(株)リカレターサービス
福岡校郵便局 鬼鞍信孝
福岡能古郵便局 戸田正義
福岡赤坂郵便局 戸田正義
日清医療食品(株) 福岡支店
福岡経営管理センター
(株)サンコー
(医)恵光会原病院
(株)西日本銀行 和白支店
(株)西日本銀行 千代町支店
(株)西日本銀行 香椎支店
(株)西日本銀行 土井支店
(株)西日本銀行 新宮支店
(株)西日本銀行 箱崎支店
(株)西日本銀行 久山支店
(株)サンネット
(株)福砂屋
(株)昭和鉄工
(医)笠松会有吉病院
(株)センタービジネス
(有)ウエダ建築社

(敬称略・順不同)

【協賛会会員】

- 松本盛二(3)
南 誠次郎(12)
中山 重夫(8)
菅 直登(8)
九州防災工業(株)
(有)西部エレベーターサービス
(有)豊友設備
(株)合産業(有)
(株)ニッコトラスト
(株)メイデン
ダイアド(株)
(株)ホスピタ
ギャラリー倉
(医)福岡ハビテーション病院
(医)江頭会さくら病院
(株)二子口九州支社
宗教法人善隣教
(株)リコー商会
(株)橋本組
下山工業(株)
学校法人原学園
(協)唐人町プラザ甘菜館
大和産業(株)福岡支店
社福社 福岡ひまわりの里
大成印刷(株)

【友の会会員】

- 立石 武泰(11)
伊藤 茂(11)
玉置 文枝(13)
水田 和夫(13)
川島 貞雄(9)
葉山 宇一(6)
大山 政志(7)
原 洋子(10)
久芳 正隆(8)
半田 耕典(6)
武藤 瑞(4)
山田 雅敏(6)
莊田 雅一(5)
永岡富代太(8)
神戸 純子(4)
渡辺美津子(5)
高田 良一(7)
安松 勇一(11)
吉村 雪江(8)
星野万里子(8)
岡部六弥太(12)
木戸 龍一(10)
星野万里子(8)
荒木 靖邦(7)
安陪 光正(5)
亀井 准輔(13)
熊谷 雅子(6)
石橋 敏一(12)
木原 敏吉(8)
坂田 貞治(6)
庄野 直彦(4)
原田 國雄(7)
森光 英子(8)
永井 功(7)
緒方 益男(7)
浦上 健(6)
山本 隆(3)
田中 貞輝(3)
武内 隆恭(2)
白水 義晴(8)
石野智恵子(12)
翠川 文子(8)
多々羅節子(12)
熊谷 豪三(2)
山崎 勉(1)
七熊 太郎(7)
西喜 代松(6)
片桐 寛子(7)
貝島 菊乃(5)
西村 俊隆(6)
明石 散人(3)
矢部 俊幸(2)
上原 孝正(2)

能古博物館ご案内
開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・中高生無料
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩10分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
(092) 883-2887
FAX (092) 883-2881
ホームページ http://www.nokonet.com/museum
メールアドレス museum@nokonet.com

能古博物館の会
協賛会(個人年間1万円(何口でも可))
友の会(法人年間3万円(何口でも可))
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
財団法人 能古博物館
納入方法 郵便振替 01730960970

